第六章　出版活動

一　昭和三十一年―三十五年の主要新刊

すでに触れたところでも察しられるように、民生は少しずつ恢復しつつあったとはいえ、国民の物質的生活を恢復、上進するためにも、また先進国文明に追随するためにも、科学技術の革新が重要視され、そのためには、科学技術機関の増設・整備が必要であった。この点では、なお非常な困難が、この時期でも続いていたため、わが国の研究者・実務家は、非常な苦心をして仕事を進めて行かざるを得なかった。

当社はこうした時代の動きを予感しつつ、この時までに到達していた科学技術を明確にする集大成書を世に贈りたい―これは実は当社の伝統的な精神でもあるのだが―と考えた。そして、出版したのが「実験化学講座」である。

この講座については、編集一切を日本化学会に依頼、同会は理事会の承認を経て編集委員会を組織、委員長小竹無二雄理学博士の下で、執筆者三百九十二名の協力によって仕事が進められ、昭和三十一年四月、第一巻「基礎技術　Ⅱ」を出版、昭和三十四年三月、第二十六巻「総索引」を出版して完結、全二十六巻三十三冊、当初計画より七冊の増加であった。

本書の出版に当っては、執筆者は関係文献を細さに渉猟するに止まらず、場合によって改めて実験を試みた後、

その要点・方法を解説し、また外国では入手容易な薬品を数ヵ月を費して合成したり、他からは推察しがたい手数を要した。しかも毎月定期刊行という厳しい時間的条件の下に、幾晩も徹夜の作業をしたり、関係者一同、まことに苦心した仕事であった。

この講座の最終「有機化合物の分析」が発売された当時、「今回の企画について払われた編集者、執筆者の努力は少なからぬものであって、これだけの企画は外国にも余り例はないと思う。日本語という制約さえなければ国際的にも評価されてよい出版物であり、言語上の制約は残念である」（「日本読書新聞」昭和三十四年三月三日号）と高橋詢東京大学助教授が評してくれた。幸いにして、このシリーズは、斯界の研究者に愛用され、その後の日本における化学関連分野大躍進の一端をにない得たのである。

戦後昭和二十年後半から出版を開始した便覧類を、この時期にもいろいろと出版したが、昭和三十一年から三十五年までに出版した便覧類は、十七点、昭和三十六年から四十年までは十九点であった。

そのなかで昭和四年以来、二度の改訂を経た「建築工学ポケットブック」は、昭和二十七年度から建築士試験制度が実施されることになり、内容的に不充分になった。このため、日本建築学会では、今後の建築士に必要な新知識全般を内容とする「建築学便覧」の編集を進め、日本建築学会創立七十周年に当る昭和三十一年十二月に公刊した。A五判二、四〇〇頁余の大冊であった。当社の従来の便覧形式では四千頁を超す大冊となるため、組版を写真植字によりオフセット印刷とした。戦中・戦後、欧米諸国で進歩した建築の新技術を戦後急速に吸収、新体系に作り上げた結果を内容としたため、新時代に適応する建築技術の指針として斯界に大きな反響をよび起した。

何時の戦争も、技術を急激に進めさせるが、第二次大戦中、アメリカでもっとも急激に発展した主な技術の一つは、通信技術と統計的手法である。戦時中「通信工学大鑑」という書名で発行されていた電気通信学会の刊行物を「通信工学ハンドブック」と改題、昭和三十二年当社から発刊した。これも原稿量が膨大であったので、「建築学便覧」と同様、オフセット印刷にした。が、これもA五判本文二、三〇〇頁の大冊となった。

以上二冊のほかに、便覧類を刊行年月順に挙げると、「溶接便覧」、「ボイラ便覧」、「農業土木ハンドブック　改訂版」、「キュポラハンドブック」、「材料試験便覧」、「油脂化学便覧」、「プレス便覧」、「化学便覧　改訂版」、「機械設計便覧」、「化学工学便覧　改訂版」、「木材工業ハンドブック」、「染料便覧」、「科学写真便覧　改訂版三冊」、「金属便覧」、「理工学のための数学ハンドブック」を、昭和三十五年までに刊行、当時の研究・技術等関係分野に広く用いられた。

いうまでもなく、便覧類以外、その時々の成果を取入れた学術上・実際上の書籍の出版をも怠らなかった。即ちR・F・シア著「トランジスタ回路　上下」(昭和三十一年)、石原藤次郎・本間仁編「応用水理学　全六冊」、日本鉄鋼協会編「鋼の熱処理」(昭和三十二年)等である。

「トランジスタ回路」は、GE社電子工学研究所所員の執筆になったもので、電電公社通信研究所所員によって邦訳されたものである。邦語としては最初の文献で、以後の日本電子工業発足の基礎となった。

「応用水理学　全六冊」は、昭和三十二年から刊行を開始した。水理学は、河川・水力・港湾その他土木工学の新たな基盤として戦後著しく発展したもので、この書は実用面から見た水理学上の諸問題をテーマとした最高水準

の文献として重視せられた。

また、昭和三十一・二年、工業生産の飛躍的増加に伴ない、硬度の高い合金鋼の需要が高まったが、これの製造も日進月歩の状況にあったので、日本鉄鋼協会では既刊の「鋼の熱処理と作業標準」の内容を一新して「鋼の熱処理」という書名で当社から昭和三十二年に刊行した。

戦後アメリカから導入して盛んとなった統計的手法の一つに、実験計画法がある。これは情報の内容よりも、その量的な面の研究から生じたものであるが、昭和三十二・三年、当社から発行した田口玄一著「実験計画法　上下二冊」は、日本における実験計画法研究書の最初の書物であった。社会科学・自然科学・医学までの研究手法の一つとして各方面から重視せられた。

プラント・レイアウト手法もアメリカで発展した成果で、わが国に定着したものである。この手法では、まず生産量を決め、それから機械台数および配置を定め、必要な建物の広さを決めるという方法であり、当時では全く新しい考え方の科学的工場計画法である。昭和三十二年刊行の沢潟作雄・中井重行共著「工場計画」は、右の理論と、既設工場の改善実例とを実地調査により詳解したものである。

戦前、理化学研究所の仁科芳雄博士が中心になり建設したサイクロトロンは、終戦直後真先に駐留軍に持ち去られたことで有名であるが、このサイクロトロンによって、戦争中、わずかながら人工の放射性同位元素が作られた。戦後昭和二十五年に、アメリカから輸入したのが端緒となり、以後、人工放射性同位元素の使用量は年々倍増するようになり、放射線源として、トレーサーとして、理・工・農・医の多方面に利用されるに至った。昭和三十四年

刊行の日本放射性同位元素協会編「ラジオアイソトープ　講義と実習」は、これらの利用者に正しい取扱い方を習得させることを目的に編集した著書で、その後、数回の改訂を経て現在もよく使われている。

昭和三十四年に仁田勇博士監修で「X線結晶学　上」を出版した。物理学・化学・生物学・地学の応用科学として、広く各種産業面が対象となるX線結晶学の全体像を明かにした、極めて程度の高い専門研究書で、現在世界のトップレベルにあるわが国のX線結晶学の基礎となったものである。下巻は昭和三十六年に出版した。

昭和三十四年から翌年にかけて、日本顕微鏡学会編「電子顕微鏡の理論と応用」全三冊を刊行した。昭和二十一年当時、日本には三台しかなかった電子顕微鏡は、昭和二十六年には一一〇台、昭和三十一年には三〇〇台に達していた。この本は急速に世界的水準に達していた日本の電子顕微鏡の理論と実用面を詳述したものである。

昭和三十五年に、半谷高久著「水質調査法」を出版した。水質汚染の問題は、例えば足尾銅山の鉱毒問題、富山県におけるイタイイタイ病、秋田阿仁鉱山の鉱毒など明治・大正・昭和と続いており、戦後では工場廃水の害などから、大きな問題になりつつあった。核実験後の雨の汚染などを注意する時代でもあって、天然水中心の記述であったが、本書の売れ行きは良好であった。

武井武編「フェライトの理論と応用」も、昭和三十五年の刊行である。フェライトは酸化鉄と他の金属酸化物の混合物で強磁性体である。金属磁石と異り、固相でも液相でも磁性をもっているため、カラーテレビの部品から情報産業の磁気記録テープまで、今日では用途は極めて広い。従って好評を以て本書も迎えられた。

同じ昭和三十二年に、星野昌一著「色彩調和と配色」を出版した。戦前には色彩調和の研究者は、極めて稀であ

ったが、戦時中の偽装や迷彩の研究で飛躍的に進歩し、戦後は工場などを含めた建築物の環境から、機械・家具・衣服・食品にまで応用されている。本書はこの分野でもっとも標準的な著作として今日に至っている。

戦後当社の出版物で最も好評を得たものの一つは「建築設計資料集成」であるが、すでに1集発行以来二十年近くも経過したため、戦後の技術革新に合せて全面的に改訂し内容を一新して、その第1集を昭和三十五年に刊行した。以後、昭和三十五年2集、昭和三十九年3集、昭和四十年4集、昭和四十四年6集、昭和四十五年5集と刊行し、完結までに十余年を費した出版であった。

戦後の学制改革によって旧制大学が全くなくなったのは、昭和二十八年三月で、翌月から新制大学のみとなった。この改革による専門学部短縮の結果として教科内容変更を已むなくしたが、昭和三十年代のはじめから教科内容が定着しはじめ、それに適した教科書が出版されるようになった。昭和三十一年から三十五年までの書名をあげると、柿内賢信著「物理学」(昭和二十八年　改訂版)、梅沢純夫著「実験有機化学」、井上宇市著「空気調和ハンドブック」、畑一夫・渡辺健一著「基礎有機化学実験」、日本金属学会編「転位論の金属学への応用」、大竹伝雄・平田光穂著「演習　化学工学熱力学」、飯高一郎著「金属学通論」などである。

教科書の翻訳も、「キッテル　固体物理学入門」、ハウゲン他著「化学反応工学」、カートメル著「原子価と分子構造」、スレーター・フランク著「力学」など多数を出版した。これらの教科書は旧制大学での使われ方とかなり異なり、学生の自学自習用としてよりも、講義内容の理解を主とする方向に変化した傾向が現われた。

二　文芸季刊誌「聲」の発行

当社は、昭和三十三年十月、文芸季刊誌を刊行することになった。その経緯に就いて概略を記しておきたい。

戦後何年か経った頃、文学者福田恆存、中村光夫、三島由紀夫、吉田健一、大岡昇平、美術史家吉川逸治の諸氏は「鉢の木会」と称する親睦機関を持ち、毎月会合して文学・美術等に就いて話し合つていた。そして各氏が独自の芸術的見地に立つ文芸季刊誌を同人組織によって発刊する計画を抱いていた。

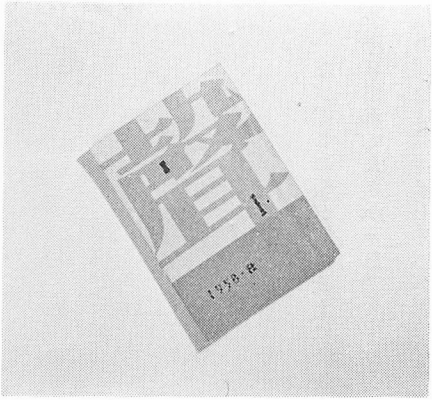
一方、当社においても、戦後、海外出版元の状況に変動があり、欧米文学の新しい動向と、それに伴う新刊書に就いて一層詳細明確な情報を把握する必要を感じていた。たまたま福田氏らの同人雑誌発刊の計画を知り、若し同誌が、英・米・仏・独の文学・美術等に関する新動向とそれらの新刊書の消息を掲載する意図があるならば、これと提携して当社の課題を実現する好機会であると考えた。これに依って得る所は、単に当社の洋書部門の充実にとどまらず、わが国の外国文化研究にも貢献することであり、多年その方面に尽力してきた当社にとって真に意義ある事業と認め、積極的に折衝を重ねることになった。当社が「鉢の木会」に協力するに至った動機は、以上の通りである。

周知のように、福田・吉田両氏はイギリス文学者、中村・大岡両氏はフランス文学者、三島氏はドイツ文学に造詣深く、同時に戦後文壇の中堅として著名であり、吉川氏は、東京大学の西洋美術史講座担任教授として世界的に知られた学者である。これだけ有力な方々が、責任を持ち、当社の希望に添うよう、諸氏と親交のある英・米・

仏・独文学の新進気鋭の学者を推薦して下さり、毎号外国文学書の新刊消息欄に多くの頁を割くことになったのである。

もともとは、福田氏と宣伝部の間に生れた話なので、当社はこれも宣伝部の所管として、雑誌発行の全費用を負担、また原稿収集その他の実務専任者を定め、誌名は「聲」とし、判型はB五判毎号二百余頁とすることなどを決定した。この型は、その後の文芸季刊誌の定型となっている。

かくて昭和三十三年春から具体的準備に入り、四月には編集同人の連名で左の挨拶状を出した。



雑誌「聲」創刊号

「聲」創刊にさいして

この度、私たちで季刊雑誌「聲」を、丸善から刊行、いたすことになりました。

九月初旬創刊の予定で、早速編集にかかります。御寄稿、その他、御面倒をおかけすることと存じますが、御支援いただければ幸甚です。

私たちの間に、同人雑誌発行の計画は早くからありました。これまで実現の機会を得なかつた宿望がここに達成されたことは、大きな喜びであり、ひとつの機運の成熟を感じさせます。

最近における文学の役割の変質、芸術全般を通じての質から量への動きは、その仕事に携る者を必ずしも安

んじさせないものがあり、自由に全力を振へる発表機関を求める気持は私たちだけでなく、人々の内心で次第に切実を加へてゐると思はれます。この要求は、文学者として一応の修錬を経て、これから時代と自己の課題に本気で向ひあはうとする時期にある者には特に強いのです。

私たちは志を同じくする人々とともに、この「聲」を仕事の本拠にして行きたいと思ひます。

発刊にさいし、略儀ながら書面で御挨拶申上げる次第です。

昭和三十三年四月

「聲」編集同人

大岡昇平

中村光夫

福田恆存

三島由紀夫

吉川逸治

吉田健一

一たび、この報が新聞紙上に公表されると、文壇・学界への反響はいうまでもなく、一般社会の関心も、初めの予想を超えて大きかった。

創刊号は、同年十月に発刊した。幸いに非常な好評を博して、以後第十号まで、毎回、滞りなく発行することが

出来た。海外文学の最も新鮮な消息が喜ばれたことはいうまでもなかったが、掲載作品が、次のように授賞されたことをみても、「聲」が文壇・学界に投じた波紋が、いかに大きかったかがわかる。

中村光夫「パリ繁昌記」（第八―第九号）第七回岸田演劇賞

山本健吉「柿本人麻呂覚書」（第一―第十号　新潮社刊）読売文学賞

福原麟太郎「チャールズ・ラム伝」（第三―第十号並びに「学鐙」に掲載　垂水書房刊）読売文学賞

円地文子「なまみこ物語」（第二―第十号　中央公論社刊）中央公論社女流文学賞

福田恆存「私の国語教室」（第一―第五号　新潮社刊）読売文学賞

一季刊誌の掲載作品がこのように多くの賞を短日月の間に受けたことは極めて稀有のことで、文壇に清新の気を注ぐという意図は果されたといってよく、同時に、約三年の間に報ぜられた海外文化の消息も、わが国の文化面に多大の成果をあげた。しかし、その間にわが学界の海外文化との接触は、日進月歩で躍進し、いわば「聲」創刊の意図は、一応所期の使命を終った。

諸般の事情を考え合せて、同人諸氏とも協議の上、昭和三十六年一月発行第十号を最終号とし、「聲」は有終の美を飾って廃刊を決定したのである。